

音との同期を促すリズムダンスの授業づくり

発表者 高柳 理沙
指導教員 吉野 聡

キーワード： 律動の快感、単元開発、授業実践

1. 緒言

日本の体育授業で取り扱われる「武道」と「ダンス」は従前選択制であったが¹⁾、2012年には、ほぼ全ての学校で男女共通で必修科目となった²⁾。体育科における表現運動領域にダンスが導入された意図について村田は「音楽やリズムが踊る誘発材料となり、リズムを共有して踊る楽しさ、人間の根源的な『律動の快感』に根差しており、『踊る原点』としてリズムダンスは重要な側面である」と述べている³⁾。また小学校学習指導要領解説の、表現運動領域の中学年からの内容を見てみると、低学年の遊びを中心とした学習から「軽快なリズムに乗って全身で踊る」ことが示されている³⁾。このことからリズムダンスは、『踊る原点』を経験できる学習として行う意義が伺え、全身で踊るような単元を作成する必要があると考えられる。しかし現在の授業は、児童が決まった振り付けのみを習得するという単元構成が多い¹⁾

先行研究では、リズムに乗るということはどういうことなのかを明らかにしたものはいくつか見られてきた。例えば、ダンス未経験の男子大学生を対象に、実際の指導現場でランニングマンというステップに注目し、その動感発生の様相の分析が挙げられる⁴⁾。しかし、リズム感を養い、音との同期を促すような授業づくりや技能の評価、その実践研究は見られない。

本研究では単元を通してリズムに乗り、音との同期を促す授業づくりを行い、その成果と課題について検討することを目的とする。

2. 研究方法

2-1 対象授業

本研究の授業実践は、2021年11月22日から12月7日にかけて行い、表現運動領域のリズムダンスの授業を全5時間で実施した。対象は茨城県内の小学校3年生2クラスに対して行われた授業である。授業に参加した生徒は2組29名3組が31名であり、授業はダンス経験10年以上の大学生1名（以下、授業者とする）と実施校に勤務する教師歴1年の男性の教師がチームティーチング方式で指導を行った。グループ編成に関しては、6人から8人で全4グループとした。その中で各クラス2チームを抽出し、創作活動の場面をビデオカメラで撮影した。

2-2 学習上の工夫

1) 選曲

単元を通してDA PUMPの「U.S.A」を選定した。この曲を選定した理由として、1. 子どもの関心や力にあった曲であること 2. BPM140前後のやや速めの弾んで踊れるテンポであることである⁵⁾。

2) リズムトレーニング

まずはどのようなリズムの種類があるのかを紹介するために、模造紙にビートの種類を書き児童に紹介した。次に児童がどのくらいリズムに乗る

能力があるのかを見るために、色々な曲の4ビートに合わせて手拍子をする練習を行った。次に8ビート、16ビート、アフタービートに合わせて手拍子を行い、バリエーションを増やした。この時点でつまづいている児童がいなかったため、色々なビートに合わせてバウンスをする反復練習を行った。この一連の練習を1、2時間目に行った。

3) 動きのパターンを習得させる練習

音楽を体全体で感じ、感じたものを身体の色々な部分で表現するために「アイソレーション」を行った。これは、身体の各部分だけを動かして特定の筋肉を刺激することにより、身体の細かい部位にまで意識を巡らせながら独立して動かすことができる活動である。この活動は単元の1、2時間目に行った。また、多様な動きを得るための参考として、「リズムカルタ」という教材を扱った⁶⁾。これは床に置かれた8種類のカルタをめくり、カルタに書いてある動きを自由に表現する活動である。リズムカルタは3時間目の活動時に行った。

4) U.S.A ダンス

創作活動としてU.S.Aダンスを行わせた。U.S.Aダンスでは、筆者が作成した定型の踊りと、グループでの活動を通してリズムカルタの動きを参考にしながらフリを作らせることを意図している。この教材では「定型の踊り」と「グループ独自の動き」の両方が存在する。

5) 単元過程

リズムダンスの単元構成については、「定型の踊り+即興表現(ステップ学習)-グループ活動-交流会」という流れを作った⁶⁾。各単元の最後にダンスバトルで使用する曲を使い、自由に踊る時間をとった。交流会では、作品を他のグループに見せ合う「ダンスバトル」を開催し、自分達の作った作品を評価してもらう時間を設定した。

1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目
ステップ習得学習		グループ創作活動		ダンスバトル
1挨拶・説明・準備体操				
2リズムトレーニング		2動きの種類を増やす練習		2ダンスバトルの説明
3動きの種類を増やす練習		3グループでの創作活動		3リハーサル
4 U.S.Aの曲に合わせて踊る ・自由に踊る	4 U.S.Aの曲に合わせて踊る ・定型の踊りを習得させる	3グループでの創作活動 ・リズムカルタの活動	3グループでの創作活動 ・独自の動きを作る 4次回の説明	3リハーサル ・フリの最終確認 4ダンスバトル (6~8人×4グループ)
アンケートの記入・挨拶				

2-4 データ収集・分析

1) 形成的授業評価

9つの授業評価項目により構成される質問紙を授業終了後、授業を受けた生徒ら2組29名、3組31名から収集した⁷⁾。

2) 音との同期に関するパフォーマンスの変容

単元を通して児童らが曲に応じた身体の動かし方の習得状況を捉えるために、VTRを用いて筆者による評価を行った。評価基準では、パフォーマンス評価尺度を用いて行った⁸⁾。観点は図1のあ

る5観点とし、4点満点で技能の変容を明らかにした。

3. 結果

3-1 形成的授業評価

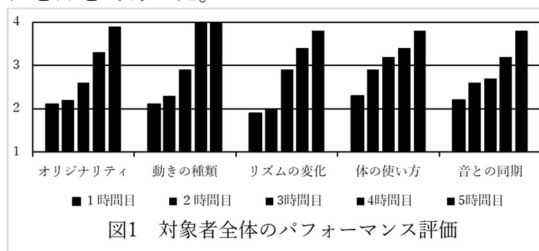
3年2組の結果を見てみると、「総合評価」では、単元最後の時間である5時間目の「総合評価」の平均が最も高いという結果になった。また、単元1時間目の2.65から単元5時間目の2.8に向上しており、高い水準を示した。3年3組の結果を見てみると、単元1時間目では「総合評価」の平均が2.34だったことに対し、単元最後の時間である5時間目では2.64に上がった。

3-2 全体のパフォーマンス評価の結果

生徒全体での結果として、どの評価項目とも単元1時間目から5時間目までに評価が上がった。また「動きの種類」は、単元4時間と単元5時間目には最高の「4」を獲得することができた。評価の伸び方を見てみると、「リズムの変化」の項目が有意に向上しているのが分かる。

3-2 チームごとのパフォーマンス評価の結果

チームごとの結果として、AチームからCチームの「動きの種類」の評価を見てみると、単元2時間目が単元1時間目に比べて評価が下がった。これは、単元2時間目で定型の踊りの習得学習をメインに活動を行い、その練習として独自の踊りを考える時間がなかったためであると考えられる。また、「音との同期」の評価が上がった理由として、創作活動中全チームポジショニングや移動経路の指導をしたが、その指導を作品に取り入れているかどうかによってチームへの評価が変わる傾向にあったためと考えられる。指導を取り入れたチームは、始めは移動に気を取られてリズムを外すことが多く見られたが、単元5時間目のダンスバトル本番では、リズムに乗って踊っていたチームがほとんどであった。



4. 考察

全体の結果から「動きの種類」と「リズムの変化」の評価が良かった理由として、単元3時間目で下位教材の「リズムカルタ」を使用したことにより、踊る振りの幅が増えたためであると考えられる。以上のことにより、今回の授業実践では高い水準のパフォーマンスが行われる傾向にあったと考えられる。

チーム別の結果から、まず「音との同期」の評価が上がった理由として、創作活動中全チームポジショニングや移動経路の指導をしたが、その指導を作品に取り入れるかによってチームへの評価が変わる傾向にあったためと考えられる。指導を取り入れたチームは、始めは移動に気を取られてリズムを外すことが多く見られたが、単元5時間目

のダンスバトル本番では、リズムに乗って踊っていたチームがほとんどであった。

なお、今回の研究によって残された課題も明らかになった。まずは、授業中において児童の課題に合わせた指導が不足していた点である。児童の動きから個別最適な指導を行うことや、生徒が感じている違和感に対してのアプローチが不足していたと考えられる。また、単元構成の中でグループでの振り付けを行ったことによって、個人のオリジナリティを引き出すことやそれを披露する場を設けることが出来なかった。よって、今回実験で使用した単元構成にはさらなる検討の余地があると考えられる。

5. 摘要

本研究では、表現運動領域におけるリズムダンスの評価基準「軽快なリズムに乗って全身で踊る」を達成するために、音楽やリズムを感じ取り音との同期を促すことをねらいとする単元作成した。また、パフォーマンス評価尺度を用いて「技能」の視点から単元の有効性を検討した。

単元の前半で「リズムを変化させる運動」や「動きのパターンを習得させる練習」の学習を行ったことで、曲に対してのアプローチの仕方を学び表現の幅が広がった。その結果「音との同期」や「リズムの変化」の項目で高い評価を得ることが出来る傾向にあったと考えられる。また、下位教材である「リズムカルタ」を扱ったことにより振りの幅が増え、児童達で行う創作活動の場面での参考になった。その結果、「リズムの変化」や「動きの種類」の項目でも高い評価を得る傾向にあった。

以上により、今回使用した単元構成にしたことで動き方を工夫することができ、学習過程を通して、音との同期を促すような成果が得られた。今後は、児童の課題に合わせた個別最適指導の仕方や単元計画、教材づくりを行っていきたい。

文献

- 1) 文部科学省(1989)『中学校学習指導要領(平成元年告示)解説体育編』東洋館出版社
- 2) 中村恭子(2013)日本のダンス教育の変遷と中学校における男女必修化の課題21(1):37-51
- 3) 村田芳子(2012)『新学習指導要領対応表現運動ーリズムダンスの最新指導法』小学館
- 4) 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説体育編』東洋館出版社。
- 5) 萩原香織(2016)ダンスにおける動感リズム発生の様相化分析。16(1):65-76
- 6) 柴山実徳・笠井利恵・滝沢洋平・近藤智靖(2019)小学校中学年のリズムダンスにおける単元開発に関する研究ー「技能」とその活用に着目してー。『日本体育大学大学院教育学研究科紀要』3(1):187-204
- 7) 高橋健夫・長谷川悦示・刈谷三郎(1994)体育授業の「形成的授業評価」作成の試み。体育学研究、39(1):29-37。
- 8) 高田康史・松尾千秋(2013)現代的なリズムのダンスの授業の学習内容に関する検討:中学生のステップ習得成果に焦点づけて。『舞踊教育学研究』15(1):35-44